

金沢市における橋からみた惣構堀・用水の規模の変遷*

Transition of Canal Dimensions in Kanazawa City – Analysis of Data on Bridges

馬場先 恵子**

By Keiko BABASAKI

概要

近世城下町から継承する金沢の堀・用水に関して、近世と大正期の水路に架かる橋に関する史料を用いて、橋長・橋幅から当時の水路の規模を推定し、現在までの変遷を分析した。また、藩政期の水路の規模や橋の大きさに関して、防衛的視点から考察した。その結果、内堀は狭小化・暗渠化されてしまったが、外堀や用水の幅に大きな変化はみられなかった。また、藩政期の水路は、外堀より内堀の方が、また、城の東側より城下中心部である西側の堀や用水の方が、水路幅が広く、橋番人が置かれた重要な橋が多かったことが示された。

1. 研究の目的

金沢では、用水の保全・整備を推進している。現在の保全対象用水は、近世金沢城下を流れていた惣構堀と用水にその起源をもつ。近世あるいはそれ以前から流れる主要な用水は、現代まで近世の流路をほぼ継承しており暗渠化も少ない。一方、現在の旧惣構堀は用水に名を変えており、明治以降暗渠化、または一部埋められたため分断され、流路も変化した箇所がみられる。近世の惣構堀や用水の水路幅など規模に関しては、文献史料ではこれまでほとんど検証されていない。絵図については、たとえば幕用図である加賀国金沢絵図¹⁾ (1668 (寛文8) 年) には、浅野川、犀川と城内の堀の水深や幅に関する記載が見られるが、その他の水路の規模に関する記載はないため、城下絵図の道路網、または一部の発掘調査から推測するしか方法がなかった。

本研究では城下町金沢の惣構堀と用水について、藩政期および大正期の水路に架かる橋に関する史料を用いて、藩末期から現代までの規模について分析し、その変遷をとらえることを目的とする。

2. 惣構・用水の規模に関する既存調査・文献の整理

まず、惣構の規模に関する発掘調査報告等を整理した^{2) ~ 4)}。

①東内惣構跡 (枯木橋詰)

発掘調査は、金沢北東部北国街道に架かる橋詰で2006年に実施された。発掘では堀の外側に18世紀、土居側に19世紀初めに石垣が築かれていたことが確認された。堀幅は当初の推定12m前後のものが、18世紀代に約4~5m、19世紀前半に約3.2m、明治以降約1.5mに狭められたと推定されている。

②西内惣構跡 (主計町地点)

発掘調査は、浅野川出水部近くの緑水苑で2008年7月から翌年3月に実施された。堀の土居側では、堀から土居にかけての斜面が確認された。また、17世紀中頃から19世紀前半の堀幅は約11mであったことが確認された。現在の幅2mに狭まったのは明治時代初めのことである。

③西外惣構跡 (升形地点)

発掘調査は、宮腰往還から城下に通ずる升形地点で2008年7、8月に実施された。堀は江戸時代に段階的に埋められ、明治期に完全に消失している。升形地点には石垣が設けられていたことが確認された。堀幅は17世紀には10.8m、18世紀末には5mと推定されている。

④西外惣構跡 (武蔵町地点)

発掘調査は、西外惣構跡升形近くの武蔵町地点で、2003年から実施された。当初、堀幅約14mであったも

*keyword : 城下町、橋堰、水路

**正会員 博士(学術) 金沢学院大学教授

美術文化学部文化財学科

(〒920-1392 石川県金沢市末町10)

のが、17世紀末～18世紀初めに約11mに縮小、19世紀初めには最大幅約3.6mまでに縮小されたことが確認された。

なお、文献⁵⁾では「金沢測量図籍」(1830年)をもとに、内道と外道間の距離から惣構全幅を推定している。それによると、堀と土居を含めた復元全幅は、西内惣構で約12～20m、東内惣構で約13m、西外惣構跡で約14～25m、東外惣構で約14～17mとしているが、いずれも堀幅は不明である。同文献によると大野庄用水の幅は、取水口付近で幅約2.9m、御荷川橋で幅約5.0mとある。さらに文献⁶⁾には、藩政期の辰巳用水について、史料をもとに城下中流部から兼六園までの幅員について1.2～2.1mとしている。

3. 研究の方法

(1) 分析方法

藩政期および大正期の水路に架かる橋に関する史料を用いて、橋の位置の特定を行うとともに、橋長、橋幅のデータを抽出し、橋の規模や橋長をもとに水路幅を推

定した。さらに、現在の橋のデータと比較することにより、3時代の規模の変遷について考察した。

用いた史料は、1824(文政7)年の「道橋帳写」⁷⁾および大正期の『稿本金澤市史』⁸⁾であり、どちらも当時の橋の位置または町名、橋長、橋幅の情報が記載されている。

橋の位置の特定には、「金府大絵図」¹⁾、「加賀金沢細見図(1876)」¹⁾、『金沢町名帳』⁹⁾、『金沢町絵図』¹⁰⁾、「最近金澤市街地図」¹¹⁾の町名、街路網、屋敷名などから橋の位置を特定した。現代の橋に関しては、金沢市提供の金沢市橋梁台帳から橋長・橋幅のデータを抽出した。

(2) 「道橋帳写」について

「道橋帳」は、作事所より道橋方へ引送りの道、橋等の修理の記録である。今回使用したものは「道橋帳写」であり、現在『金沢市史』⁷⁾に収録されている。筆頭に「文政七年以後之由成」とあり、1824年以後の橋の記録とされる。記載してある内容は、橋、樋、坂道等の場所及び各々の幅、長さ、その他に関する修理記事であり、「道橋帳」にさらに追加された記載も少しある。橋につ

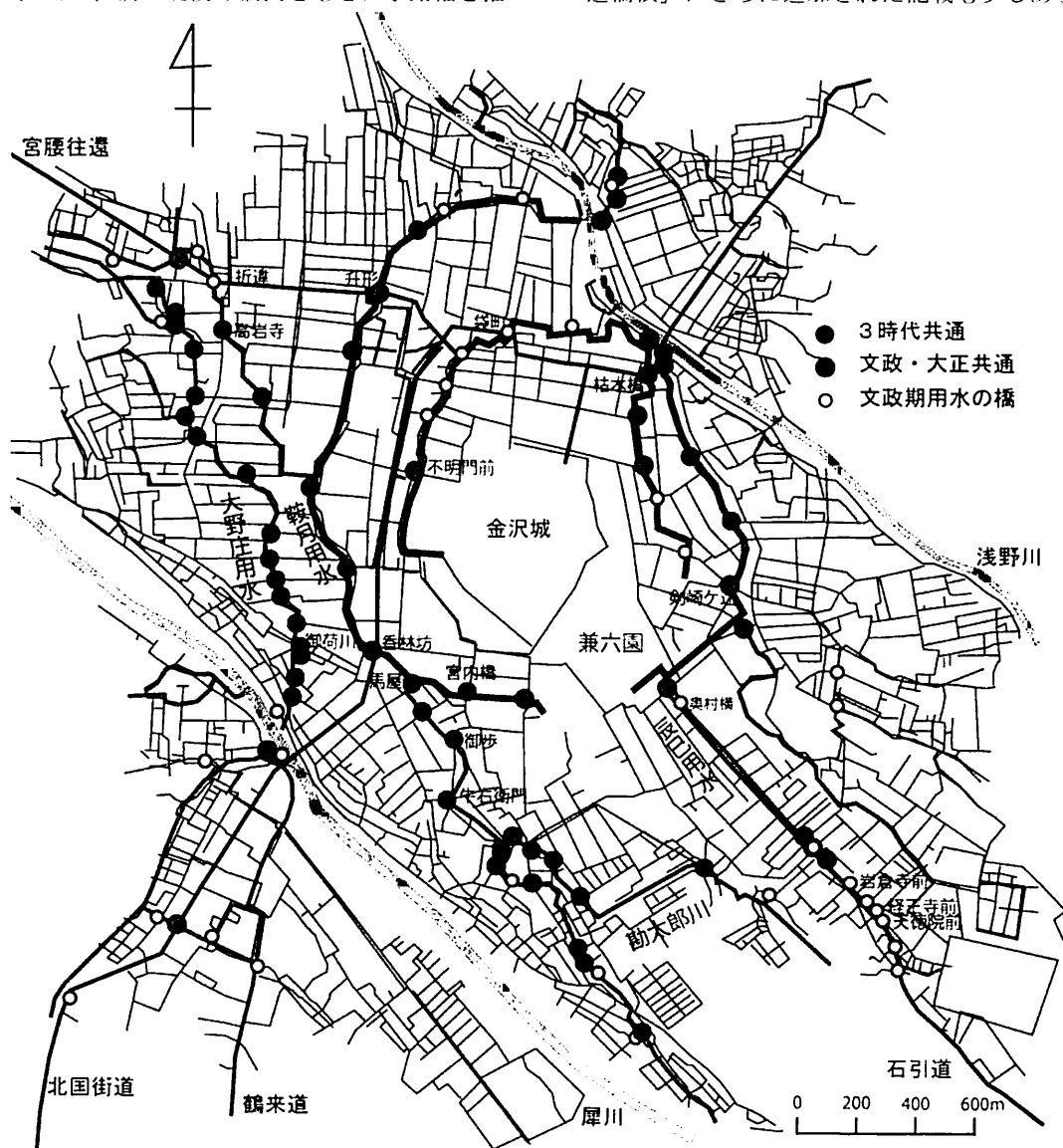


図-1 道橋帳の橋位置と現代までの共通の橋(作成:馬場先)

いては、惣構堀や主な用水を「川」と称し、川に架かる橋とその周辺の溝に架かる橋について、渡・幅が記されている。また、稀に橋台や周りの構造が記載してある場合もある。基本的な表記の仕方は、「坂下御門前橋渡廿丈、幅四尺半、橋台石垣共」あるいは「宮内橋渡五間、幅二間、橋台石垣共」となっており、最初に橋の位置（坂下御門前）、もしくは橋の名前（宮内橋）を表記し、次に橋長（渡）、さらに、幅が表記されている。場合によりその後「橋台石垣共」など、橋とともに修繕した橋台や石蓋などを含めた内容が表記されている。溝橋の位置の多くは特定できなかった。樋の場合には、「樋」または、「口樋、悪水樋」と表記され、「長」と「幅」または「太サ」が記されている。橋・樋の他に道の長さ等も一部記載してある。記載してある順番にも流れがあり、城郭南西端の不明御門から始まり、西内惣構堀→東内惣構堀→東外惣構堀→東外惣構堀外側→西外惣構堀→浅野川より北側→西外惣構堀外側→犀川より南側→犀川より城側南部と、基本的に城を中心に円周上に順に記載されている。

本研究では特に主要水路の「橋」に関して橋渡・幅をそれぞれメートル化すると共に、地図上に位置を特定した。図-1に藩政期の主要水路の橋の位置、主要な橋名等を示す。なお、現在、旧惣構堀は辰巳用水、鞍月用水、母衣町川、源太郎川、九人橋川と称しているが、本稿では、藩政期の東・西惣構堀と用水名を優先する。そのため、辰巳用水は小立野台地北端までとした。以下の分析では、ある程度のデータ数が得られた犀川・浅野川より内側の主要水路のみを対象とする。

（3）分析結果

各時代の橋について堀・用水ごとに分類し集計した。なお、道橋帳から得られた数値の時代を文政期と表記する。橋長は水路の幅、橋幅は道路幅に対応するものとして分析を行った。現代の用水については、文政・大正期に存在した橋またはその近辺の橋をできるだけ多く抽出した。各時代の橋長と橋幅について、堀・用水ごとの平均値を表-1,2、図-2に示す。また、時代により用水に架かる橋の位置や数が異なるため、3時代に共通する橋のみを抽出し、それぞれの平均値を求め、時代による規模の変遷を考察した（表-1,2、図-3）。ただし、現代の旧内惣構堀はほとんどが暗渠化されたため、文政・大正期の2時代で表わした。鞍月用水は、犀川から取水され北西方向に流れ、中流域で西外惣構堀となりさらに北西に分流するため、3分割して西外惣構堀と鞍月用水上流、同下流とした。表中にデータ数を示してあり、共通する橋が1件しかないものは図-3では用水名をカッコ付きで示してある。

a) 橋長について

図-2をみると、橋長（水路幅）には、各時代とも同様の傾向がみられる。すなわち、堀に関しては、西側の堀の方が東側の堀より規模が大きく、また、外堀より内堀

表-1 水路に架かる橋の長さの変遷

惣構橋長		数	文政	数	大正	数	現代
西内堀	時代平均	6	7.3	1	7.6		
	文政-大正	1	9.0	1	7.6		
東内堀	時代平均	6	5.1	4	4.0		
	文政-大正	4	6.3	4	4.0		
西外堀	時代平均	10	6.2	9	5.8	6	6.3
	3時代共通	4	6.0	4	6.0	4	6.4
東外堀	時代平均	6	3.6	5	3.1	5	3.7
	3時代共通	3	4.1	3	3.2	3	3.9
用水橋長		数	文政	数	大正	数	現代
辰巳	時代平均	9	2.0	11	3.0	6	2.7
	文政-大正	3	2.2	3	2.9		
勘太郎	時代平均	6	3.7	9	3.5	8	3.5
	3時代共通	4	3.6	4	3.6	4	3.4
鞍月	時代平均	13	4.0	16	3.9	12	3.6
	3時代共通	7	4.6	7	4.4	7	3.6
鞍月	時代平均	5	4.9	14	4.7	11	5.0
	3時代共通	2	5.4	2	4.6	2	4.9
大野庄	時代平均	18	4.8	23	4.3	22	4.3
	3時代共通	17	4.9	17	4.4	17	4.2

表-2 水路に架かる橋の幅の変遷

惣構橋幅		数	文政	数	大正	数	現代
西内堀	時代平均	6	4.4	1	1.8		
	文政-大正	1	3.6	1	1.8		
東内堀	時代平均	6	3.7	4	4.7		
	文政-大正	4	3.6	4	4.7		
西外堀	時代平均	10	4.0	9	5.8	6	11.3
	3時代共通	4	3.6	4	5.4	4	12.1
東外堀	時代平均	6	4.8	5	3.3	5	4.0
	3時代共通	3	3.2	3	3.0	3	4.4
用水橋幅		数	文政	数	大正	数	現代
辰巳	時代平均	9	7.3	11	3.6	6	4.4
	文政-大正	3	4.6	3	6.6		
勘太郎	時代平均	6	2.4	9	2.6	8	4.2
	3時代共通	4	2.3	4	3.3	4	5.2
鞍月	時代平均	13	2.5	16	2.9	12	5.3
	3時代共通	7	2.5	7	3.0	7	4.1
鞍月	時代平均	5	3.1	14	3.1	11	7.4
	3時代共通	2	2.6	2	3.0	2	9.0
大野庄	時代平均	18	2.3	23	2.7	22	5.8
	3時代共通	17	2.4	17	2.7	17	5.6

の方が大きいといえる。文政期の西内惣構堀に架かる橋長の平均値は7.3m、西外惣構堀では6.2m、東内惣構堀は5.1m、東外惣構堀は3.6mであった。東外惣構堀は他の堀に比べて堀幅が小さく城下を流れる他の用水の規模と変わらない。この堀の外側は町人地に接しており、他の堀の多くの区間が武家地に接しているのに対して町人地と接する区間がかなり長い。

用水の橋長では鞍月用水下流と大野庄用水の規模が大きく、文政期の平均値はそれぞれ4.9m、4.8mである。鞍月用水上流、勘太郎川はやや小さく4m前後の値を取る。辰巳用水は文政期の橋長の値は最も小さく2mであった。

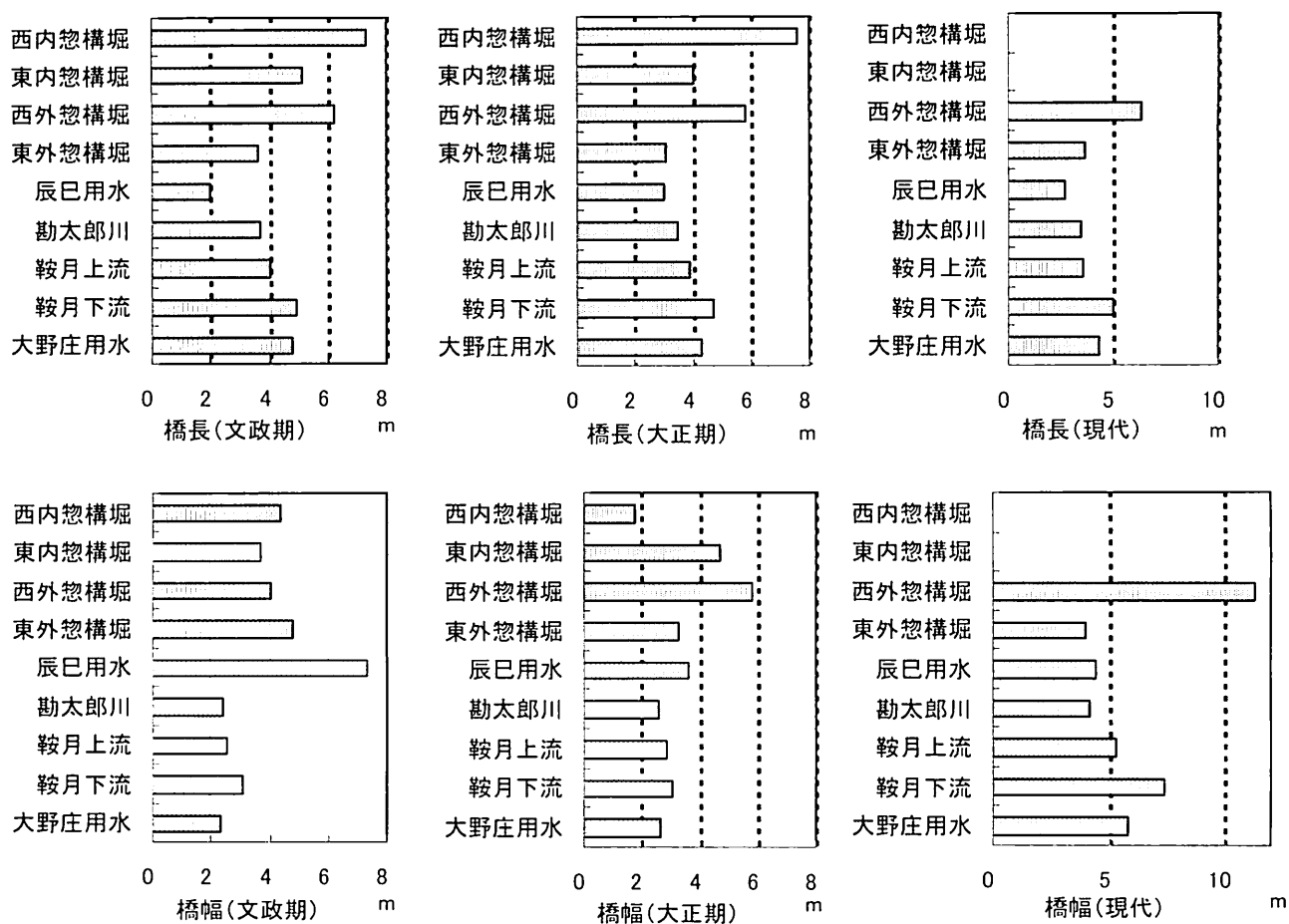


図-2 3時代の水路の橋長・橋幅の平均値

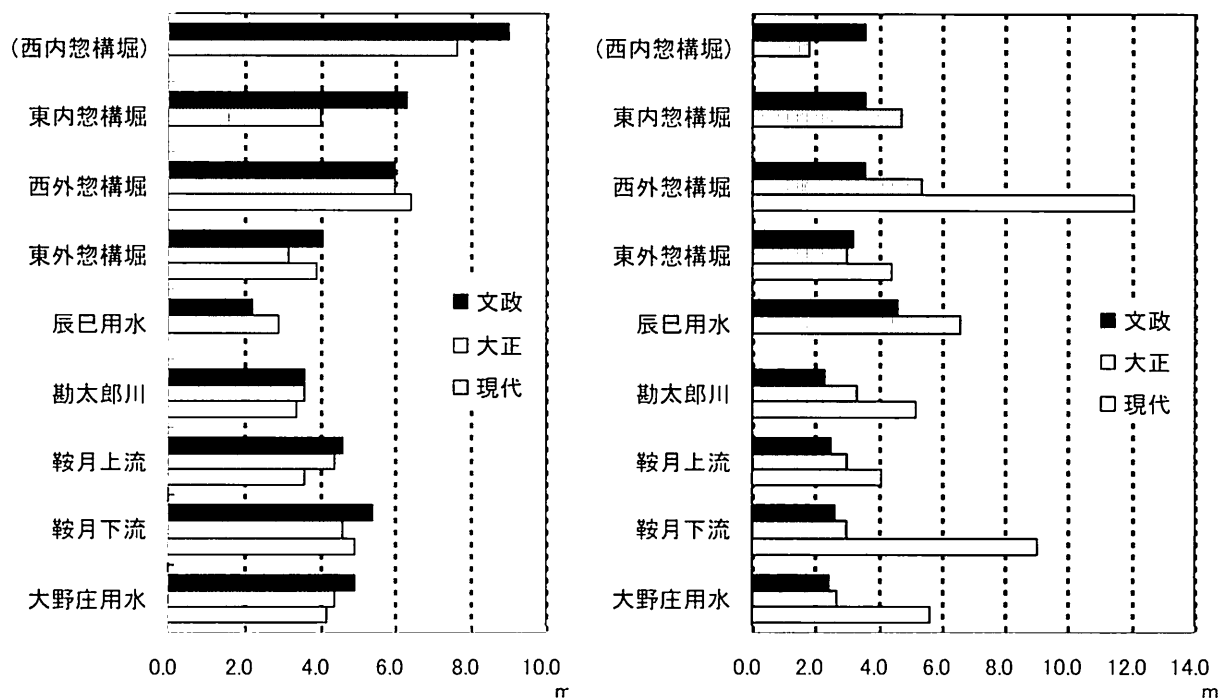


図-3 3時代の水路に共通する橋の橋長・橋幅の平均値

特に文政期には、惣構では外堀より内堀、東より西、用水に関しても城西の鞍月用水下流、大野庄用水の水路幅が広く、防衛的な意図がうかがわれる。また、大野庄用水は別名御荷川というように、水運にも用いられていた。

3 時代に共通の橋について橋長の変遷をみると(図-3)、堀幅の広がった内惣構堀も大正期には東内惣構堀では 6.3m から 4.0m に縮小する。西内惣構堀では共通する橋は不明門橋 1 件のみであるが、9.0m から 7.6m とかなり橋長が短くなった。多くは埋め立てられ残された水路の幅も狭められたと考えられる。外惣構堀については、共通する橋の平均値は西外惣構堀では文政期と大正期に 6.0m、現代で 6.4m、東外惣構堀では文政期 4.1m が大正期に 3.2m とやや狭まるが、現代 3.9m と文政期の幅に近くなる。用水については、辰巳用水が文政期の 2.2m から大正期には 2.9m とやや大きくなったが、ほとんどの用水は、やや値が減少している程度であり変化がみられない。

b) 橋幅について

図-2 をみると、橋幅の平均値の大きな水路は時代によってかなり異なる。文政期では惣構堀に架かる橋の幅の方が、辰巳用水を除いた他の用水の橋の幅より広く、平均値は 3.7m ～ 4.8m であった。辰巳用水の橋は文政期の水路の中で最も広く平均値は 7.3m であり、その他の用水の橋では 2.3 ～ 3.1m であった。大正期の橋幅では西外惣構堀が 5.8m、東内惣構堀が 4.7m と広く、その他の水路の橋は 1.8 ～ 3.6m で 2 ～ 3m の橋幅が多い。現代では西外惣構堀の橋が 11.3m と突出して広く、次いで鞍月下流の 7.4m、その他の橋は 4.0 ～ 5.8m である。大正、現代の橋幅は道路幅に連動していると考えられる。

橋幅の変遷をみると(図-3)、共通する橋では時代が下るにつれて橋幅が広がっている水路が多い。特に大正期から現代にかけて、橋幅はすべての用水で拡張している。中でも西外惣構堀、鞍月下流、大野庄用水と市街地中心部の水路上の橋幅の拡張が多く、都市化・自動車化に伴う道路幅員の拡張が原因とみられる。

c) 藩政期の橋の規模に関する考察

特に藩政期の堀と用水、さらに架けられた橋の役割について考えるために、道橋帳の橋の規模と橋番人のいた橋や広見の位置との関係から考察した。

1811(文化8)年の『金沢町名帳』¹²⁾に惣構番人、および橋番人の名前が記されている。橋番人は、東内惣構堀では、九人橋、蔵人橋、稲荷橋、枯木橋の4橋、西内惣構堀では、西町橋、十間町橋、下近江町橋、袋町橋、新町橋の5橋、東外惣構堀では、下材木町橋、備中橋、剣崎止橋の3橋、西外惣構堀では、壘屋橋、宮内橋、香林坊橋、右衛門橋、(村井四つ屋)、甲斐守前土橋(中之橋)、図書橋、枳形橋、熊坂橋、東末寺橋、塩屋町橋の10橋、その他の橋では、用水では主計橋、御厩橋、折違橋、御徒橋、御荷川橋の5橋、川では屋川・浅野川大橋、浅野

川小橋の3橋である。御厩橋は道橋帳では馬屋橋と記載されている。文献¹³⁾でも同じ史料に触れ、馬屋橋は惣構堀に架かる橋としているが、文献¹⁴⁾で「総構堀橋ニアラサルモ、総構ニ通スル要路」とあり、また、「金府大絵図」でも惣構堀への合流地点である鞍月用水の橋として描かれている。

著者による藩政期の広見に関する研究¹⁵⁾では、現存する最古の金沢城下絵図である「寛文七年金沢図」(1667年)をもとに、金沢で広見と呼ばれている道路の膨らみ部分について、その位置や形状を分析している。その結果、全体の約7割が水路と接しており、橋に直結する広見は全体の3割あること、特に戦略上重要な堀や川に接する広見では、外側より内側(城郭側)の道路に多く位置していること、周辺部より中心部の広見の方が大きく、城を囲む道路に多く配置されていることなどを示した。交差点を結合させ急な広がりをもたせた大きな広見ほど意図的に配置した可能性が高く、防衛戦略的な計画がうかがえ、主要街道と重要な水路との結節点には橋番所を置くとともに部分的に大きく道路を広げ、城郭近辺の道路と同様、危急の対応が可能のように計画されたと結論付けた。

以上の文献をもとに、文政期の「道橋帳写」による個々の橋の位置、文化期の橋番人のいた橋を橋長(橋渡)別(図-4)に、寛文期の広見のあった位置を橋幅別(図-5)に示す。

橋長では、前述のように外惣構堀より内惣構堀、東より西の堀の方が平均値は大きかったが、特に大きな橋は北國街道と惣構との交差近辺、すなわち南西部に長さ5間以上、北東部に4～5間の橋が多い。東外惣構の堀に架かる橋はあまり大きなものは見られない。発掘調査では、枯木橋近辺の堀幅は18世紀代に約4～5m、19世紀前半に約3.2mと推定されていたが、道橋帳では「橋渡4間」(7.2m)とかなり長い。堀の上に架かる橋が土居を越えてどのような構造で架かっていたのか検討が必要である。升形地点の堀幅については、18世紀末に5mと推定されているが道橋帳では3間1尺(5.7m)と、5mの推定値に架かる橋の数値としては妥当な長さである。道橋帳によると最も「橋渡」の値の大きな橋は西外惣構堀の香林坊橋と西内惣構堀の袋町で6間(10.8m)、次いで西外惣構堀の宮内橋と西内惣構堀の不明御門前5間(9.0m)である。枯木橋と同様にどちらも防衛上重要な地点であり、堀幅もこの地点は広がったのか、または、堀と土居をまたぐ橋のため橋長が長くなったと考えられる。長さ5間以上の橋はこの他に鞍月用水から西外惣構に合流する地点の「馬屋橋」も5間(9.0m)である。その他の用水の橋はいずれも4間未満である。そのうち3～4間の比較的大きな橋は大野庄用水と鞍月用水に多く見られる。鞍月用水上流の牛右衛門橋、鞍月用水下流の「高岩寺前」、「折違町」(宮腰道から城下への入口・屈曲部)、大野庄用水上流(南部)御荷川橋から続く5

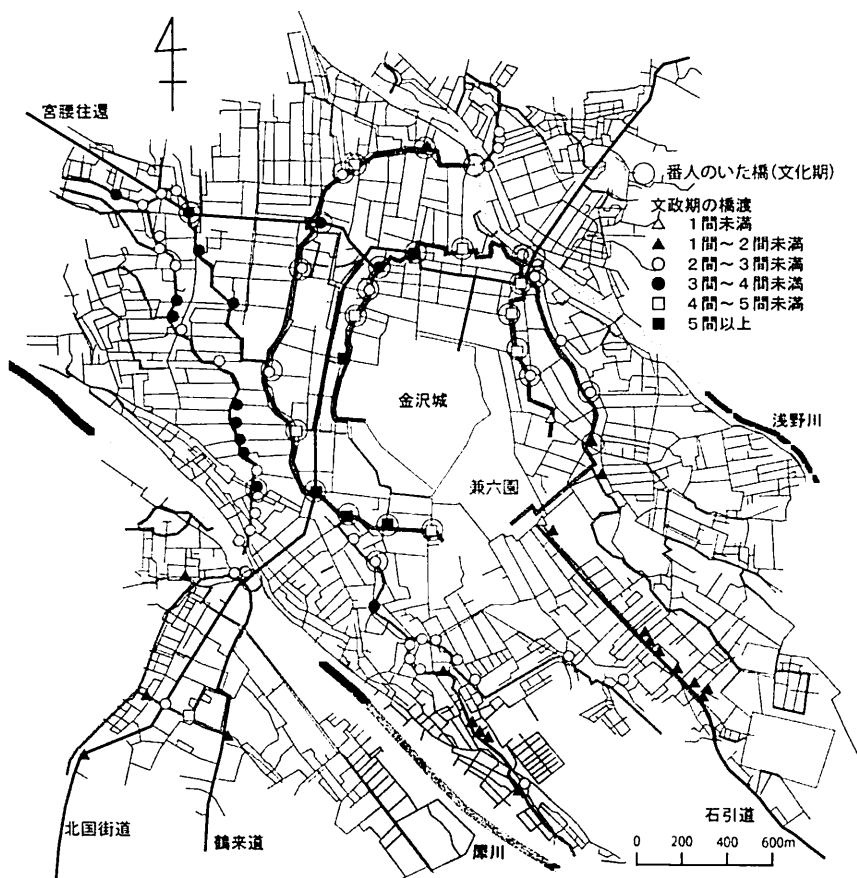


図-4 橋長別にみた橋の分布と橋番人がいた橋

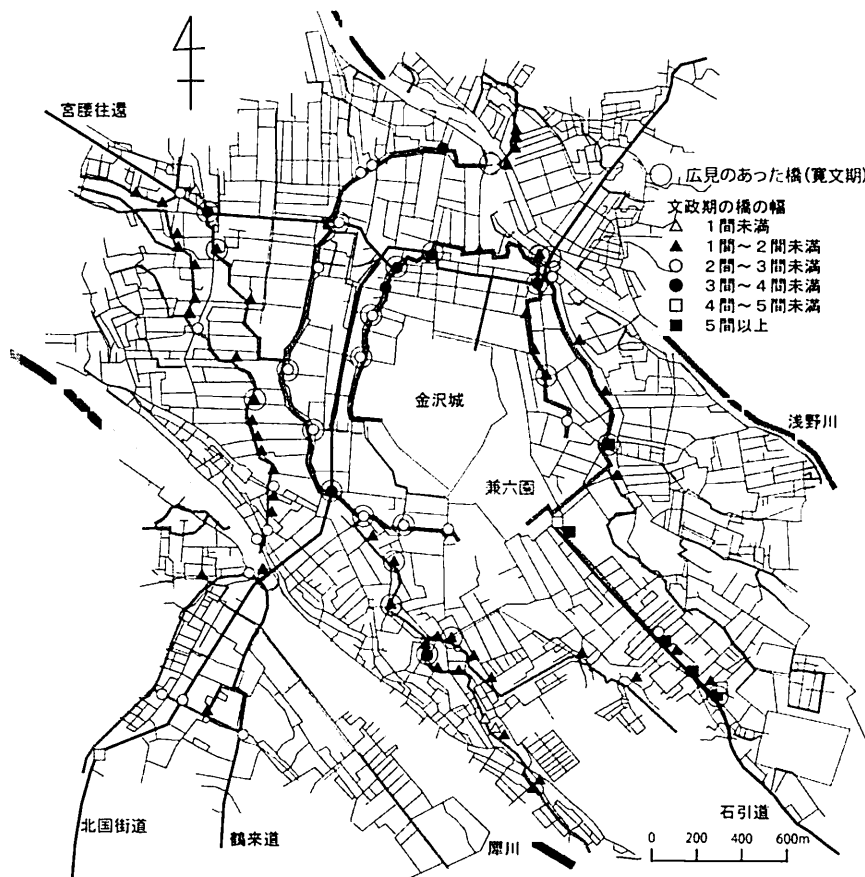


図-5 橋幅別にみた橋の分布と広見があった橋

橋、さらにやや下流に 3 橋ある。前述の文献[12]には御荷川橋で幅約 5.0mとあり、道橋帳の橋渡 3 間 (5.4m)とも符合する。

「幅」については、水路と道路が斜交、または道路の横を流れる水路から沿道敷地に橋が架かる場合があり、必ずしも道路幅を反映するとは限らない。辰巳用水に幅 5 間以上の橋が多いが、上流側では「天徳院入口」、「経王寺前入口」、「岩倉寺前」、「奥村丹後守殿横」、など、寺院や土屋敷に通じる橋が多い。惣構堀に架かる橋では、西内・西外惣構堀ではほとんどの橋が幅 2 間以上であるが、東内・東外惣構堀の橋では 2 間未満の橋も多い。その中で東外惣構堀の「剣崎ヶ辻」は「幅 7 間」(12.6m)と最も大きい。道橋帳では「橋台石垣共」と記載されており修繕した石垣部分も含めた幅の可能性もあるが、橋番所のあった橋であり、東外惣構堀では唯一広見もみられる橋である。東から城内に向かう重要な橋であったことが考えられる。

橋番人のいた橋については前述のように、惣構に架かる主要な橋には置かれている。その他の橋「折違橋、馬屋町、御荷川橋」は、いずれも橋渡が大きく幅も広い。御徒橋にも橋番人がいたとあるが、防衛上の重要性については不明である。用水両側に沿った道路をつなぐ橋であり、橋の西側の道路が用水の屈曲に沿って膨んだ広見になっている。

その他、広見と橋についての関連性は、時代の異なるデータのため不明確ではあるが、橋番人がいた橋、すなわち重要とされていた橋詰には広見があった。特に城に向かう重要な道路上に架かる橋には広見があり、橋番人がいたことがわかる。

4 まとめ

本研究では、水路に架かる橋の大きさに関する史料をもとに、文政期、大正期、現代の水路の規模を推定した。推定された水路幅は、時代を通して共通性が見られた。すなわち、惣構堀については、外堀より内堀、東側より西側の堀幅の方が広いこと、用水では鞍月用水下流、大野庄用水の幅が広く、城の西側、城下中心部を流れる水路幅が広く防衛的な意図がうかがわれた。時代の変遷に伴い、内堀はかなり狭められ、あるいは暗渠化・消滅するが、その他の堀、用水は、多少狭められたものもあるが、それほど規模に変化はみられない。

橋幅については、連結する道路幅との関連性が高く、時代によって違いがみられた。すなわち、道路の拡張に伴い多くの水路で橋幅は拡張した。また、文政期では惣構堀の方が他の多くの用水より橋幅が広がったが、現代では、市街地中心部の水路ほど橋幅が広い。

総じて、藩政期の惣構堀に架かる橋は橋長・橋幅とも規模が大きいものであったが、これらの橋には橋番所が設けられており、防衛上重要な橋であった。その他橋番人がいた橋の多くは、いずれも橋長が長く幅も広い。ま

た、こうした重要とされる多くの橋に連結する道路には広見があった。

今後の課題として、水路の規模の変遷とその時代背景について都市の近代化との関係で捉えていくこと、また、今回のデータ分析に関して、橋長を水路幅、橋幅を道路幅としたが、当時の橋と橋周辺の構造を踏まえた水路の規模推定や、道路幅に関する史料との整合性を検証することが必要である。

参考文献

- 1) 『古絵図探訪』、能登印刷 (DVD ROM デジタルデータ、写真撮影したファイルとして収録されている)
- 2) 『金沢市指定史跡 金沢城惣構跡』、金沢市パンフレット、2009 年
- 3) 『平成 20 年度金沢市埋蔵文化財調査年報』、金沢市埋蔵文化財センター、pp.3-4、2009 年
- 4) 「いいねっと金沢 金沢城惣構跡の調査」、<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/11104/bunkazaimain/torikumi/sougamaechousa.html>
- 5) 『城下町金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化 保存調査報告書』、金沢市、pp.178-189、2009 年
- 6) 『金沢の用水・こぼし』、金沢市教育委員会、調査報告書前編、p.52、2000 年 3 月
- 7) 『金沢市史 資料編 6 近世四 町政と城下』、金沢市、pp. 715-729、2000 年
- 8) 『稿本金澤市史 市街編第一 第 3 章 地勢 第 12 節 橋梁』、1916 (大正 5) 年刊行復刻、pp.152-166、1973 年
- 9) 『金沢市図書館叢書(一) 金沢町 名帳 (文化 8 年 (1811))』、金沢市玉川図書館、1997 年 12 月
- 10) 『金沢市図書館叢書(二) 金沢町絵図 (文化 8 年 (1811))』、金沢市玉川図書館、1998 年 3 月
- 11) 「最近金澤市街地図」、宇都宮書店、1911 (明治 44) 年、県立図書館蔵
- 12) 文献 9)、pp.484-488
- 13) 田中喜男：『城下町金沢』、日本書院、pp.30-31、1966 年
- 14) 氏家栄太郎：『金澤市街 温知叢誌 乾・坤』、北國新聞社、p.96、1999 年
- 15) 馬場先恵子：金沢城下の広見の起源と配置について、土木史研究講演集、Vol.23、pp.369-372、2003 年